



上高地梓川畔でポーランド隊一行と共に

今回の受入れ体制は、従来のように一つの委員会が単独でこれに当るのではなく、もっと広汎に、多くの会員が参加してより大きな力が発揮出来るよう、既存の委員会の枠を越えた実行委員会を組織し、東京のみならず、地方の会員方にも協力をお願いすることにした。実行委員長には神崎忠男君になつてもらい八面六臂の活躍をしてもらった。招聘のプランは伊丹紹泰君も加わり練り上げたのだが、最初の予定が三週間か

ヒマラヤで、冬期登山に目覚ましい活躍をするポーランドの岳人と交流出来ないものか、という希

望が、ポーランド大使館のご好意で実現する運びとなり、此度の訪日となった。

ポーランド山岳会との交換登山

鈴木郭之



1986年(昭和61年)

7月号(No. 493)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目次

ポーランド山岳会との交換登山 鈴木郭之	(1)
シンポジウム 「ポーランド登山隊の強さ」 高所登山研究委員会	(2)
海外の山 「強い男たちとユーモア」 「太白山」「日米交換登山アメリカの報告書から(上)」 丹沢茅ヶ岳に公衆電話開通 仙丈院登山日武居士 東西南北	(2)
「石黒清蔵顕彰碑移設のお知らせ」 「上高地山研利用の記」「山岳スキーの記録」「能郷白山とその女たち」 「山岳写真家・風見武秀氏に叙勲」 お知らせ	(4)
「今夏『国際アルピニスト大会』松本市で開催」「マナスルトレッキングの日付等変更について」「山日記」 報告 京都支部設立 会務報告・ルーム日誌・会員移動 会員名簿(1985)の正誤表	(8)(11)(9)(11)(11)

日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み

図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

●ルーム夏休み期間

8月11日(月)より16日(土)まで

ら二週間、更に到着日が一日ずれるなどハプニングが続き、歓迎会も、来日日程のブリーフィングも出来ぬまま成田到着後、直ちに三班に分かれ行動してもらったこととなった(これは偏に予算と日程の関係によるもの)。

二十一日朝、アエロフロート五七七便で成田に到着したポーランド隊を、大塚副会長と、神崎、藤井正彦の両君、小生とで迎えた。一行は、アンジェイ・ザヴァダ(隊長、五七)、レシエック・チヒ(三四)、クシストフ・ヴィエリツキ(三六)、ルドヴィク・ヴィルチンスキー(三八)、ミロスワフ・ダンサル(三三)、トマシ・レヴァンドフスキー(二二)、ヤーツェク・ザチコフスキー(二二)の七名で、ザヴァダ隊長はポーランド大使館のボーグシュ参事官に電話で到着を告げると、そのままチヒ、ヴィエリツキ、ダンサルの三氏と、読売新聞の島田公博氏、小生に伴わ

れ京都に直行、ヴィルチンスキー氏と若手二名は東京に一泊し、翌日、中山茂樹君らに連れられ、フリークライミングに小川山へ向かった。

京都は、京大のノシヤック登頂以来、ポーランドとは縁が深く、新しく出来た京都支部の斉藤支部長、岩坪五郎氏の出迎えを受け、到着早々、熱気溢れる交歓の幕開けとなった。

京都の一行は更に二手に分かれ、ザヴァダ、チヒ両氏が関西支部へ、ヴィエリツキ、ダンサル両氏が東海支部へ向かった。

一同が再び一緒になったのは二十四日の河口湖だが、この日は指導委員会担当の富士登山の日で、委員長小林政志君や他の会員も参加し、ポーランド隊一行はそのまま一睡もせず頂上を目指した。

二十五日に東京へ戻り、翌日は都内観光、二十七日は、この会報二ページで松永理事が書いている

ように、高所委員会担当のシンポジウムに出席した。冬に強いポーランド隊の秘密を探る興味深い集会だった。この会は同時通訳で行なわれたが、通訳は伴夫人と村田夫人のご協力、同時通訳の器具については、松田評議員の尽力が大きかった。

翌二十八日は松田評議員、神崎実行委員長、青年懇談会の絹川祥夫理事、松本正樹会員と松本に向かった。松本では岡沢祐吉会報担当理事も加わり、松本で開かれる国際アルピニスト大会の先駆けとして、松本市長を表敬訪問、そして松本城、エブソンの松本工場を見学した後、上高地へ向かった。上高地は翌日から雨で、溜沢ではテントも張れず、二日間無聊をかこった。しかし三十一日は快晴で、ザヴァダ、チヒ氏は岳人の永田氏と穂高に登り、残りは勝山康雄、高取剛志君と屏風岩でフリークライミングを行なった。

当夜は信濃支部四〇周年記念行事が西糸屋で開かれ、今西会長、佐々前会長、蒲生支部長、田中評議員他、信濃支部の方々と一タを楽しく過した。翌六月一日も快晴で、一行はウェストン祭に参加、ダンサル氏を中心にポーランドの歌を歌いウ祭を盛上げた。

帰京した翌日、ザヴァダ、チヒ氏は総務及び集委員会担当の、

お知らせ電話

234 六六五九

安田生命ホールで開かれた「講演と映画の夕」に出席、日本側からは原真、高橋和之氏が出席し、司会は新井陽一郎理事が行なった。残りの五名はフリークライミングに城ヶ崎へ行った。

六月三日は集会和総務委員会が担当した歓送会が私学会館で、今西会長始め、山田、大塚副会長、数々の来賓を迎え盛大に行なわれ、そして五日に、大塚副会長、神崎、藤井君、それに小生の見送りを受けて成田より帰国した。以上が今回の行事のあらましであるが、詳しくは各担当者から報告があると思う。

このような行事で問題になるのは経費であるが、幸い財務担当の橋本清理事のご配慮と、早川瑞璃子氏のご苦勞、総務担当の鳴原啓佑理事のご理解、宮下秀樹評議員の口利き、島田公博氏のご努力で読売広告社を通し稲葉食品から「シンポジウム」

「ポーランド登山隊の強さ」

今回のポーランド山岳会来日を機に、当委員会では、五月二十七日、「ポーランド登山隊の強さ」をテーマに、現代ヒマラヤ登山をリードするクライマー達と語るシンポジウムを開催しましたので簡単に報告致します。

寄付を頂いた他、各地方支部にも種々負担をお掛けし、参加して頂いた方々は全てボランティアとしてご協力下さった。更に、その他の面でご協力下さった日産自動車、シャープなど各企業、団体や会員以外の方々にも大変お世話になった。この場を借り厚く御礼申上げたい。

こうした行事は本会のような層の厚い団体で始めて出来るものだろう。だが、アメリカ山岳会のように、今回も、来日したメンバーの中にスターがいたためマスコミも動き、経費面でご援助を得、事なきを得たが、これからはもっと地味に、若い人中心の本来の姿に戻って国際交流の活動を続けるべきだと思う。

来年は日本からポーランドに出掛けるわけだが、会員諸兄弟の積極的なご参加をお願いする。

(海外委員会)

高所登山研究委員会

兼ねて池田常道・坂下直枝会員とポーランド隊の全員。

参加者は五十三名となり、会場にした岸記念体育館三〇一号室はほぼ満員になりました。

開会。山田副会長が、昨今の円高問題を軽妙に織り込んで、今後の両国登山界の交流推進の意向と

海外の山

強い男たちとユーモア

ポーランドのクライマーたちは、いずれも個性あふれる存在だった。

数多くの国家規模の遠征隊長経験者、アンジェイ・ザヴァダが滞日中もまとめ役をつとめたものの、他の男たちは小学生のようにザヴァダ先生の言いつけを守ろうなどとは考えてもいないようだった。

シンポジウムの席で、百五十年に及んだ国の分割、第二次大戦後の困難な再建など自分たちの国の歴史とアルピニズムの流れについて簡単に述べたあと、ザヴァダは、「私たちのコンプレックス」として、八千峰のピークに初めて立った者が一人もいない事実をあげた。

「それで、なるべく国際的に効果のある登頂をねらおうと決めました。必らず新しいことをやる、ほかの国がたどったルートは行かない、と」

町の山岳会やクラブで構成する「フエデレシヨン」があって、国が資金援助する大規模な登山隊のメンバーは、このフエデレシヨンの推薦で決まる。推薦を伝える電話を皆ドキドキしながら待っている、という言い方がおかしかった。

しかし、ほかのクライマーたちは、もっと自由な登り方もやっていることを強調する。

「私の場合はザヴァダさんのような全体主義的な隊の構成ではありません」とにこやかな口調で語ったのは、ダウラギリ東壁をアルパイン・スタイルで登った、ルドヴィク・ヴィルチンスキーだ。

「競争のように山登りを考えているのは一握りの人たちで、私が山に登るのは、自由のため、自分の喜びのためです」

私のところにはまだ電話を頂いていませんが、とつけ加えたこの洞穴学の専門家は、実は推薦する側の当のスポーツ委員会の委員長であることを、あとでザヴァダが面白おかしく暴露した。選挙で三年ごとに選ばれるのだ、という。

冬のエベレストに登った二人、チヒとヴィエリツキは、それぞれ身長一八八センチと一六六センチ、隊随一のノッポとチビだったそうだが、エネルギーにあふれていた。

「冬、七千以上の高所では生命がないだろう、とかつてヒラリーが言った。そういう既成概念への挑戦にひかれる。といっても、ボクはマゾヒストなんかじゃない」と、チヒ。

ブロード・ピークをベースから頂上まで二十二時間で往復して話題になったヴィエリツキは、「めざした壁が危険過ぎた。まだ若いし、人生を愛してるので普通のルートしかなかった。でも、スピードは目的じゃない、いいアルピニストは必ず年金をもらうまで生きられると思ってますよ」と、楽天的に語った。

ポーランドの岳人たちと何回か会ったが、自由、人生、愛。そんな言葉が、話をするたびに出てきた気がする。そして、何となく印象に残るのは、困難な登攀や、登山の哲学について語る時に出てくるあのユーモアの感覚だ。

「日本人は少しシリアスすぎるね」

そんな言葉を聞くとは思わなかったが、わが日本の登山界がウィットとユーモアのセンスに乏しいことを、いともあっさりとい見破られてしまったわけである。強いだけが魅力じゃない。

(江本嘉伸)

歓迎の辞を述べて、アンジェイ・ザヴァダ隊長がメンバーの紹介をした後、一九八五年のチョー・オユーの冬期初登時のそれを主とした、ポーランド隊海外登山のスライド数十枚を映写しながら、その登山の沿革が説明されました。

ポーランドの登山は一九三〇年代に始まりましたが、実際には第二次大戦後、困難な国際情勢や戦火による破壊の中から自由を求める意識の高まるにつれ、特に、一九五〇年代の後半には熱狂的ともいえる程に登山愛好者が増え、西側アルピニストとは交流のない不利な条件の中で、アルプスからヒマラヤ登山への情熱が育てられていったということでした。

現在は、ワルシャワの若い大学生などを中心とした四五千人の愛好者がいますが、活動的な登山者はその半分、本格的な登山家と呼ばれる人達は二百名程度ということでした。

この少数の本格的な登山家への道は、まったく個人的な努力だけによって辿ることも可能ですが、特に、知力と体力に優れた若手のアルピニストを養成するために、組織的な教育と訓練が行なわれているという点は、大変興味をひきました。

一九七一年、ザヴァダ氏を隊長とする遠征隊がキンヤン・キャンシュに初登頂したことでポ政府もその意義を認め、だんだんに援助を

受けられるようになりましたが、一九七三年のノシヤツクの冬期初登頂には安全のために夜間の登攀活動を積極的にとり入れるなど、その後に続く独自の登山形態を作ったともいわれます。

この七三年には、既存の四十二登山クラブを連盟として組織化し、規模に応じた人数の代表者による総会を三年毎に開催して役員を選出。役員は(神様のような)強い権限を持ち、体育省からの予算の分配や、国立のトレーニング・センターでの教育や、やはり、三年に一度の割合で組織される政府援助の遠征隊の、リーダー決定にまで力が及ぶということでした。こうして選ばれた最優秀のリーダーに声を掛けられ、遠征に参加する隊員には個人的な支出はまったくないので、多くのクライマー達はその電話を待っているという点ですが、そのような点から「新しい形の行動で、新しいルートから未知のピークに登頂する」という、きわめて積極的な計画が立てられ、そのために、もともと強力なチームが編成されるのだという説明がありました。

その基盤になるのは、やはり優秀なアルピニストの養成だといえますが、多くの希望者の中から、厳しい試験によってその才能が認定された優秀な若者は、国内だけでなく、アルプスからカフカズへ

海外の山

太白山

塚本 圭 一

中国陝西省太白山について会報でお願いしたところ、早速会員の島崎徹氏から仙台の太白山についての調査報告書をお送りいただきました。中国の太白山、朝鮮の太白山、そして日本の太白山と東進するにしたがって、文明と同様に規模が小さくなるという。

太白山の資料が西安の西北大学からはいり、次第にその姿が浮かんできた。西北大学の資料は永河遺跡に関するもので、私達のたどるうとしているルートについてもかなりくわしく示されている。それによると登山口が一一〇〇で、頂上が三七六七、その距離が約四二・ととなる。そして、その行程を私達は三日間で往復する計画だったから、かなり体力のいる山であることがわかった。四月の中央アルプスでのトレーニング合宿も二五・を背にラッセルをするという体力中心のものに変更した。

しかし、四月六日の出発までに、太白山の山姿を入手することはできなかった。ただ陝西省博物館の碑林の「太白全図」の拓本だけが、私達に太白山のイメージをあたえ続けていた。

四月二六日、大阪空港より北京に飛び、その日の夜には西安にはいる。

次の二七日、中国隊員十五名が合流し、結団式、装備、食料の分配をする。ともかく、ザックを背にするのはじめてであるという中国隊員に、アイゼン、ビッケル、その他の装備の使い方はじまり、日中友好が進められた。

二八日、早朝よりマイクロバスで西安より西に向かい、山麓の町眉県にはいる。ここでは盛大な歓迎をうけ感激する。

眉県から太白山の南の谷にはいり、蒿平寺という登山基地でバスをおりる。

蒿平寺から、中山寺、下白雲、上白雲、大殿と、何かがごとに道教のお寺や宿坊があつて、丁度、立山、御岳登山のような気分となる。

しかし、二二二〇の大殿の手前では雪上を登ることになる。結局、二八日は四時間余りかかって大殿に登り着く。

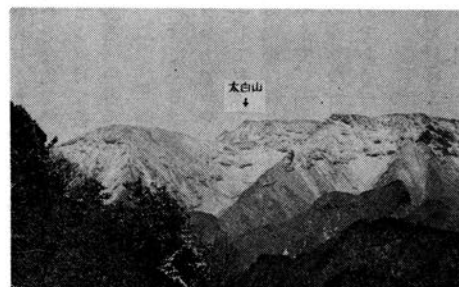
ここまでの登りは京都の北山の風景とあまり違つてはいなかった。広葉樹がすべて葉をつける季節となればかなり違ったものとなるだろうが、今の季節は実に淋しいものだった。

そして、二九日、A・B・Cの各登攀隊は三〇六〇の放羊寺まで、小谷総隊長らの本部隊は二九〇〇の明星寺まで登る。

三〇日、六時三〇分に放羊寺を出発した登攀隊四名全員午後二時三〇分太白山頂に登頂した。

この日、本隊は斗母宮まで下山し、登攀隊との連絡をとり、大殿を経由して、眉県の本部に登頂の様子が伝えられた。

眉県の本部には川北副隊長、清水秘書長が待機し、蒿平寺には中国登山協会競許先生、西安には史占春先生



海外の山

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

の登山も行ない、ヒンドウクシユ、パミールなどで低酸素の訓練まで受ける、国家組織的な教育システムであると聞きました。

国の援助によった遠征登山であるエベレストやチョー・オユーのそれに対して、クシストフ・ヴィエリッキ隊員のブロード・ピークや、同隊員のノシャックでの短時間で驚異的な登山は、小人数の、個人を主体にした登山隊でありましたが、これらの登山に対する若手クライマーの考えは、短時間での登攀が目的の第一ではなく、結果的に短時間に登れたのだという表現や、冬期登山における困難に対しては、必ず自分にできるのだと信じ込むことから始まるという話など、さりげない表現の中に、彼らのずば抜けた自己管理能力や強靱な意志力がうかがわれるものが多くありました。

時間が不足気味で、彼らの強さの根源を知るまでには至りませんでした。ザヴァダ隊長のいう疲労に堪えられる人間、回復の早い人間、いつでも何処でも眠れる人間こそヒマラヤ登山にも強さを発揮できるのだという言葉は、現在の私にも大変印象的なものでありました。

このシンボジウムのためにご尽力くださった皆さんにお礼申し上げます。

(文責・松永敏郎)

丹沢塔ノ岳に

公衆電話開通

鳥居 亮
森 武昭
重村 清

去る四月二十六日(土)、丹沢塔ノ岳(一四九一メートル)の県立尊仏山荘に無線公衆電話が開通しました。年間二〇万人近い登山者にとって、この公衆電話は、非常時にもとより、一般連絡用として大いに役立つことと思います。また、山荘から気象協会へ提供している夏期の気象情報(NHKテレビの山の天気予報)でも、当事者の受ける恩恵は大きいと思います。

この無線公衆電話の特長は、年間を通して常設されていることと、電源として太陽電池を用いていることです。私も自然エネルギーグループは、北アルプスでの太陽光発電システムの実用化の実績をもとに、今回の無線電話の設置に当たり、電源確保に技術的観点から全面的に協力いたしました。即ち、太陽電池八〇Wを四セット屋根に設置し、二六〇Ahのバッテリーを二系列で使用するシステムの設計及び取り付けをおこなったのです。

開通当日は、富士山がよく見える爽やかな天候のもと、午前十一時から関係者及び一般登山者をおこえて、山荘前広場で開通式がおこ

の山が私達の吉報を待っていた。

日米交換登山アメリカの報告書から(上)

海外委員 中村 テル

昨年二月に交換登山第一回交流として日本から、松本正城、鈴木昇己、山崎祐和、中山茂樹の四名がアラスカのバルデズ(Valdez)にアイスクライミング等の技術習得にでかけたのは、秋にはアメリカ山岳会アラスカ支部より優秀なロッククライマーを日本に招聘することになった。数度の往復文書で細い点まで取りきめ、いよいよ十月十四日より二週間、日本での交流登山として海外委員会の計画で実施されることになった。

優秀なロッククライマーを沢山抱えていると信じていたわれわれ日本側にとって、アラスカ支部でも、第一回の日本側クライマーに劣らないロッククライマーを選抜するのは、矢張り容易ではなかったらしく、最終的にはアラスカ支部より三名、他の州より三名と決定された。昨年二月に自分の家に日本よりのクライマーを泊め、なにかと世話をした当時のアメリカ山岳会副会長で、医者であるアンドリュー・エンビック博士がリーダーとなった。

日本よりのクライマーが彼の家に滞在中、二月九日より二十一日間に全米よりロッククライマーが集るアイスクライミング大会が催され、日米両国のクライマー達に加えて、報道関係やカメラマン達総勢三十九名がエンビック家に泊った。以下はエンビック博士からの日本における交換登山報告の抜粋である。

アラスカ支部よりの代表クライマーのうち最年長である John Wilford は四十歳であるが、一見二十九歳くらいに見える程動作も若々しく、ロッククライミングとスキの優秀な山岳会員である。職業は大工であるが、生れながらの登山家である。

Rosie Andrews は三十三歳でニューヨークから参加した世界的に有名な女流ロッククライマーである。彼女は英仏等の海外交流登山の経験を持つ

ていて、いち早く此の計画に参加したのである。ロッククライミングのガイドを職業としている。彼女のテクニクは定評がある。

Mark Wilford は二十八歳でチェッコスロバキア山岳会との交換登山に参加し、工学部学生としての綿密な観察力をそなえている。

リーダーのエンビックは、彼に言わせれば「しがない田舎医者である。一番手近なロッククライミングの場所は二、二〇〇?離れたヨセミテで、寸暇を盗んで、出掛けている。ただ私の家にはゼロックス、ワードプロセッサや、常時電話にでられる誰かがいて、そして私は住所不定でない等の理由で交換登山隊長に選ばれた」そうである。しかし仲々のクライマーで、朝早くから夜おそくまでの彼のエネルギーな行動力には日本側はただだ呆れていたのである。

われわれはできるだけ多くの日本に関する記事を読み、日本が何んな国を知りたいと思った。幸いにBMCが訪日した山に関する記事をよみ、日本のチームは一人二役をみごとにこなし、昨夕の呑んべと今日のクライマーが同一人物であることは信じられないほど変身の技に優れていることを教えてくれた。

Road と Gillian Fawcett が演じた失敗を繰り返さぬようにした。色々な予備知識のおかげで小川山の金峰山荘では「阿呆」に見られずにすんだ、即ち「家に入るには靴をぬぐ」。お風呂に入り、宿のキモノを着、お箸を使いこなす等々。

Road Mark は矢張り十月十三日に別の飛行機で成田に着く筈であったが、彼はサンフランシスコで病気になる、代りの John Bucher も都合がつかず結局五名に減ってしまった。

JACのクラブハウスでは会員達の暖い歓迎を受け、名前だけはよく知っているK2の北壁から

海外の山

なわれ、山荘から秦野市長への記念通話がおこなわれました。また、JAC本部にも開通のメッセージが届けられました。

今回の公衆電話の設置は、言うまでもなく、NTTのご厚意によるものであり、神奈川支社、秦野電報電話局の関係各位に厚くお礼を申し上げたいと思います。また、山荘経営者山岸猛男氏、神奈川県庁古谷聖司氏等山岳関係者の熱意により、実現の運びとなったことを付記し、開通を共に喜びたいと思います。なおNTTは開通を記念して「祝塔ノ岳山頂公衆電話開通」のテレフォンカードを発行しました。

仙丈院夢山日武居士

小野 幸

この戒名は本会の名誉会員であり、わたしの学校の先輩だった交野武一さんのである。交野さんの生涯を知っておられる方は、仙丈岳と夢科山、ほんとうによく名づけられたものと思われるだろう。

交野さんはつとめ先、三井総元方の仕事で長野の夢科山麓に生活されていたのが戦争中であつた。会の人達もそこへよく遊びに行かされていた。茨木画伯も会報(一三〇号・昭19)に『冬の夢科池の平』で「十二月の時とちがって雪も大門峠の頂上近き地には相当に多かった。峯の小屋に着いたら交

野君一行が迎えてくれた」とある。この頃は今の白樺湖もうまきらず、初期の大正池のように立木が池の中からだを出していた。

これから間もなく茨木さんは穂高で行方不明、交野さんは捜索隊に加わったり、遺児の方々のお世話をされた。戦後おつとめ場所が丸の内に移られてからは、わたしのところと近かったので、よくお会いした。茨木さんの思い出会をやるうと聞いたのもこの三井ビルだった。その時出席された先輩たちの半数近くが今では故人となら

れている。戦後間もなくだったと思う。中央線中野の古本屋でKanoとサインのある本を見つけた。HockのWanderungenである。カタノという名もすくないと思ひ、それから間もなく学校の山岳部の土曜会に部室で交野さんにこの本のことを告げたら「おれの本だよ、あいつだな、とにかく一度見せてくれ」といわれた。「あいつ」は身内の方であつた。

交野さんは絵や詩がすきで、特に西洋美術には興味を持たれていた。お便りも絵の絵はがきでよくいただいていた。字体は島崎藤村のような、あたたかいものであつた。

さて戒名の「仙丈院夢山」の夢山はさきに記した通り、戦前に生活された夢科山のことであり、仙

海外の山

の登頂者、坂下直枝やDavid Snow賞受賞のためシアトル支部大会に招待された田村俊介氏とも再会をたのしんだ。歓迎会のおと、私学会館と言うステンレススチールとガラス張りの堂々たるホテルに案内された。

翌日東京の西北にある秩父山岳地帯に猛スピードで運ばれた。一車線のレーン幅はせせこましい二車線に区ざられ、曲角には土手もなく、全員車に酔ってしまった。なるほど道理で日本製車には、やたらに把手がついている訳である。

日本の運転手は仲々上手であり、考えられないような猛スピードでとばす。車にはスピード超過を警告するサイレンが鳴る。そのサイレンを消すようにアメリカのロックミュージックをならす。二台の自動車事故を見た。両方とも低速で走り、クラッチをふみ、駐車場から急に飛び出したが、カーブを切れずに衝突したとか。

小川山は日本人の間では最も人気のあるロッククライミング地区であるようで、超現実主義的な背景に尖がった白い花こう岩で、よごれない結晶体が、赤、黄、金色の秋の紅葉と松の間からぞいており、溪の真ん中を清流が走っている。時折、F16戦闘機が飛んでいた。約三十人が集っていた。一緒に登ったり、傍観したり、写真を撮ったり、またはインタビューに来た連中である。

われわれはクラシッククライミングの場所である。目的となり、時には、みんな助手となり、協力者となり、忠告者となり、また見物人ともなった。誰でも、こんな時には、うまく登りたいものだ。すくなくとも、登ろうと努める。こんなプレッシャーは隊員中の唯一の女性のロージーに一番ひどかった。確かに世界一の女流クライマーではないにしても、彼女は、彼女なりに責任を感じていて、マークはとてもクールに振舞っていて、プレ

ッシャーを感じているかどうか分からなかった。しかし旅行の終り頃に、彼はすくなくともどの日本人とも同じように、うまく登れるということをはっきりさせた。多分日本人は体重に比例する力はわれわれより優れている。だが、ロッククライミングの歴史が浅いので細かい或る部分は分かっていないらしい。しかし、マークのようなクライマーを注目することのできるこの機会に細部に亘っておぼえることができる。日本人は呑み込みが早いので定評がある。

やや退屈したので、日本でのクラシックな登攀地域として知られている小川山レエバックに出かけ、少し時間をかけた長いルートに登る必要を感じた。ここはオーバーハングのレフトフエシングコーナーにクラックがあり、汚れていないし、被写体として美しい場所である。蒼空のもとに、真白い岩が秋の紅葉を背景に朝日にきらめいていて、此のルートは私の日本における登攀経験の凝縮のようなものだった。夜は日本伝来の「ふろ」で疲れを癒やし(家族用しか混浴はできない)、キリンビールを飲み、盛り沢山の米と一緒に魚と野菜の不思議なおつまみ料理を箸で喰べる……。実際の話、お箸を使いこなせなければ、われわれは餓死することになる。またアメリカ食事にこだわったから、これまた、餓死である。われわれは、どつぷりと日本古来の教養に漬かってしまった。東京の街中では洋食は、たしかに、どこでも食べられるが、山小屋ではそうはいかない。小川山へ村山氏と佐藤夫人が訪ねてくれた。佐藤夫人はわれわれがアメリカ食を恋しがっていると考えて、クロワッサンや葡萄酒まで差し入れてくれた。彼女は美しいゴッドマザーで、八十一歳でもまだ豊饒としていた。

マークと私は、日本人にとって標準的なフィンガークラックでも、われわれアメリカ人にとつて、べらぼうにむずかしく、不可能なプロジェクト

海外の山

丈院は亡くなられるまで生活しておられた長野県長谷村の南アルプス仙丈岳であることは無論なので



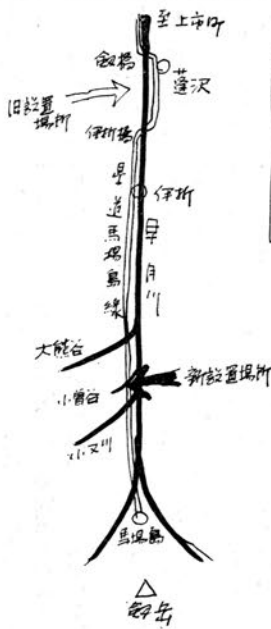
ある。それにしても、わたしの手元にある交野さんの古本は永久にお見せできなくなってしまう。

石黒清蔵顕彰碑移設のお知らせ

本会物故会員石黒清蔵（一八九八～一九六七・会員番号六一三）氏の顕彰碑は、旧来の富山県上市町逢沢地内から、同町伊折地内へ移設になりました。今までの場所が、休耕によって道順もわからなくなつたため、県道馬場島線の

すぐわきの、わかりやすい場所へ移設になったものです。

石黒氏は、大正十年に初岳池ノ谷を初下降し、翌大正十四年に池ノ谷を初登攀して初岳登頂に成功した人であり、また晩年は自然破壊や登山規制に強く反対を主張した人です。池ノ谷初下降、初登攀の記録は本会会報二二九号に、山崎安治氏によって紹介されている。石黒清蔵追悼文は「山岳」六十二年に、小生によるものが掲載されている。



石黒清蔵顕彰碑移設場所

海外の山トであることを発見した。われわれの指は彼等の指の二倍程大きくはないが。

日本人にとって S.I.C. は時には、われわれにとっては S.I.D. で、本質的に登攀不可能で、どこのつまり、指に深い切り傷をつけ、関節を捻挫させ、期待外れの複雑な墜落と相成る。勿論、こんなルートであるから、同じ場所であれこれと試登攀をくり返し、僅かな幸運のおかげで、岩と宙空にしつかりとへばりついたクライマーの写真が

人が参列して行なわれた。

石黒清蔵顕彰碑移設世話人代表

橋本 廣

上高地山研利用の記

鈴木 利也

昭和六十年八月九日、新宿八・三〇のバス「さわやか信州号」で出発。上高地は四十年振りの再訪、前回は中学生のころ、兄たちと島々谷をわたつての徳本越であったが、今は都心から数時間で河童橋際のターミナルまで入れる便

山岳スキーの記録

北ア、双六岳周辺の三大河川の源流を滑る

山本 良三

この計画は、京都の今西錦司先生一五〇〇山登頂祝賀会の夜、本多勝一氏と「どこかの山へ滑りに行こう」と、話し合ったことが発端となり、山と溪谷社勤務で会員の節田重節氏、蒲田温泉双六荘及び双六小屋の主人小池潜氏等の協力を得て実現した山岳スキーであり、珍らしい記録ではないかと思ひ載せてもらふことにした。

去る五月二十六日の、朝日新聞夕刊に本多氏が「北ア「三大源流」を滑る」と題して紹介しているが、ここではその記録性を取り上げてみたいと思う。前出の小池氏によると信濃川・黒部川・神通川の三大源流を同時にスキーで滑降した記録は耳にしないし、小滝大助氏や三浦雄一郎氏等

でき上るのである。雨のため予定より早く南西の海岸、城ヶ崎へと小川山を後にした。（以下次号）

海外の山

観光週間（八月一日～七日）の目的

- ①観光地の美化（ゴミの持ち帰り）
- ②正しい観光觀念の普及（国際交流にも資する点）
- ③その他（観光客を交通事故、火災事故等から守る）

総務委員会

も双六岳周辺の稜線部は滑っているが、源流まで降りて登り返したりはしていないという。だから、今回が初滑降の記録となるのではないかと、同氏は言う。初登頂は勿論素晴らしいが、初滑降の記録もあってよいだろう。しかし、既に滑降されている可能性も考えられるのだ。

四月三十日の早朝、荷上げ用ヘリに乗せてもらい、新穂高温泉近くのヘリポートから七分間の飛行で双六の冬期小屋（二五五〇）に入った。

双六岳と三俣蓮華岳は前出の三大河川の源流に当り、その山容はスキー登山向きで、立山から槍ヶ岳への日本を代表する山岳スキールートの中に位置している。谷すじも比較的ゆるやかな沢がそれぞれの源流へ落ちており、スキー滑降には格好のようだが、どの程度まで滑降可能なかはわからなかった。双六小屋を拠点にした四日間の滑降の記録の概要は次の通りである。なお、本多氏はハンワグの兼用靴にビネッサの縮具、私はスキ

り小じんまりして、緑の中のコーディネートという感じ。入口の鐘と、木ぼりのJACマークが気がきいている。今回二泊の目的は山登りにあらず、上高地周辺の花々を探るといふもの（もちろん山と溪谷美を楽しむことも含めて）。初日は田代池まで探り、二日目は徳沢、横尾まで歩き、最終日は大正池を往復した。

山研ホールは食堂を兼ね、山の本来揃えられている。びっくりにしたのは「野鳥」の複製版があったこと。図書委員で野鳥ファンがいるのか……。私も求めたいと思つて「山に忘れたパイプ」やおなじみ藤江さんのサイン入り画集もあり。「山の歌」の本の中には作曲者来訪のサインもみられた。おぼさんの話では「誰もあまりみないよ」とのことであったが、停滞日などにはコーヒーでもすすりながら、ゆっくりページをくりたいところ。山の花の本はおぼさんが探し出してくれたが、もう何種類かは揃えておいてほしい。

食事は全部おまかせした。出された一汁一菜が大変よい。もちろん家でのご飯献立とは異なるが、山に入ったらこれでいい。よこんで全部いただいたし、その心構えもほしい。風呂も一日汗を流せるのがよい。

夜は奈良から来という母子づれの家族と花火に興じたり、京都の女子グループと河童橋を散歩、島

田さんの紹介で西糸屋へ寄り、コーヒーを飲みながら歓談した。夜半目ざめて窓からのぞくとカシオペア座がM(Wではない)型にかかり、流れ星を三つ数えた眠りに入る。

朝は山研前庭のフジアザミの株におどろきヤマオダマキの花をながめ、キツリフネのスケッチなどをする。おぼさんも花がすきといつて、同じくスケッチをするので作品をみせてもらった。花とスケッチの話ははずみ、二日目の夜は二人でビールの乾杯となった。

おぼさんもいい人である。若い頃の島田辺の話、山仕事の話など、おそくまで話してもらったのが心に残る。このような話も誰か記録にとめておいてほしいもの一つ。もっと時間があれば続きを聞きたかった。心配なのはこことこを胃を悪くしているとのこと。はやくよくなつてもらいたい。

上高地は俗化したとなげく人も多い。たしか登山者、観光客もふえ、マナーも低下しているのは事実だ。それ故にみんながマナーを守り、梓川、大正池、それととりまく山々を大切にしていきたい。そして私もまた機会をつくり再度、再度訪ねたいと考えている。島田さん一家のあたたいもてなしに感謝し、山研の発展を祈って筆をおく。（これは昨年下書きをしておいたものを清書(?)しましたー筆者）。

山岳スキ一の記録

一軌に十数年前のマークTRを使用、シールは共に貼り付け型。

四月三十日、神通川源流へは双六岳(二八六〇)の頂上から双六谷へ滑り降りた。

標高差約五百、全長約一・五。上部は広大なカールを滑る。最初は四〇度近い急斜面だが、表面が適度に腐っている雪面なので気にならな。双六谷の出合から小屋まで戻る登りは、ゆるやかな谷を一時間、双六小屋の主人小池氏も同行。

五月一日、三俣蓮華岳を目指したが、天候悪化のため、丸山(二八五四)の手前稜線から広々とした斜面を丸山沢(前出の小池氏とも相談の上、源頭にある丸山から仮称した)へ滑り込み、ほぼまっすぐに湯俣川との出合へ出る標高差約八百、全長約三・延々と平均斜度三〇程度の滑りやすい広い谷を下る。湯俣川に出たら右岸の森林帯を少し林間滑走してモミ沢との出合まで下る。そこから小屋への登りはシールをつけて、モミ沢を約二時間。

五月三日、黒部川源流の滑降に向う。双六小屋を出て、九時前に三俣蓮華岳に立ち、まだ表面クラストの残る黒部五郎岳への縦走路に沿って一八〇ほど滑りおりる。ここからほぼ最北の対岸の

祖父平を見おろして、小窓沢へ滑り込んで、黒部川源流へ向かった。上部は広大なカール、途中から森林帯の中のせまい沢になり、変化に富んだ滑降となるが、昨日の大雨のせいか重い雪に難儀する。

標高差約五六〇、直線距離一・半たらずの、下部は狭く細い谷である。黒部川に下りきった所でシールをつけて、黒部川源流のなだらかな谷をさかのぼって二時間、鷲羽岳と三俣蓮華岳の鞍部に達する。ここでシールをはずし、反対側の弥助沢を滑りおりた。上部は四〇度を超える急斜面もあり、スリル満点の滑降となるが、下部はデブリが多く、快適とはいえない。モミ沢との出合まで滑る。

標高差約五百、直線距離二・、モミ沢を二時間登れば双六小屋に帰りつく。

同行者は立教大山部OBの長沼茂氏。五月四日、帰路は、弓折岳(二五八八)から標高差約千の左俣と小池新道との合流点まで、直線距離三・五、弓折岳から鏡平を目指して大滑降、鏡沢を経て秩父沢に達すると、おびただしいデブリの海。何とか抜け出すと、次は技戸沢出合にデブリの小山。スキーを背負って越え、笠新道の少し下までスキーをつけておりた。

能郷白山と、

その美女たち

神原 忠夫

能郷白山などという山は、ついぞきいたことがない。しかし、五万分の一標準図を調べてみると、その岐阜6号に「能郷白山」というのがあるのでびっくりました。

JAC岐阜支部の設立15周年記

念で、この山に登るといので参加。新幹線で岐阜羽島へ。名鉄に乗換えて新岐阜へ。そこから根尾樽見行のバスで一時間四十分。更に根尾村々営バスで終点の能郷へ二十分。私たちは一ヶ月前の長島で降りるべきところ、NO!GO!ノ

ゴー(能郷)とばかり終点まで行ってしまった。ここには白山神社(養老元年九一七年開基)があり、その長い石段の下には古い

能楽堂が建っている。毎年四月十三日にはここで国重要無形民俗文化財の能・狂言が上演されるといふ。この能は、現在世に行なわれるものとは異り、舞う人と謡う人とがハッキリ区別されていてシテやワキの役柄は世襲制であるといふ。これは能・狂言が始まった中世初期(鎌倉時代)の形が、今でも残っていると考えられている。それにしてもこの山奥に、何故こ

のような能が残されたのであろうか。何等かの理由で京の上流人が峠を越えてこの地にやって来て、閉鎖された社会を築いたものと思われる。このようなロマンスを想定して考えをめぐらしてゆくと、気のせいか、この辺りには美女が多いように思えた。宿で働く婦人たちが肌が白く、ひきしまった面立ちが独特の気品を備えている。バスで一諸だった女子高校生も、お嬢様の官女のような品のよい美人であった。更にこのバスに、途中から乗り込んで来た小学生の女の子は、アツと驚くような美女であったことを思い出す。女の子ばかり見ているようで不公平だから、窓外を通る自転車の男の子も見てみたが、やはり同じで、山村には似合わない立派な顔をした美少年たちであった。

さて、私は絵描きだから特殊な感情でそう思うのかと思ひ、同行の岩堀瑞子氏にきいてみたが、彼女も同感とのことであつたから、まず、間違ひはないだろう。念のため宿の一女性にこの話をしてみたら、彼女は京都の出だそうで、いよいよ私の推理にも花が咲いたというわけである。

ところで目指す能郷白山であるが、標高は一六一・三。福井県と岐阜県の境にあり、日本海を吹き来る北西風の影響を受けて雪が深く、里では桜も散り青葉若葉だというのに、頂上付近は五メー

トルもの雪が残っている。明治三十九年発行の「日本山岳志」(高頭式編)によると、昔は能郷山(のうこうさん)といい、一名白山とも称したそうである。今の標準図では「のうごはくさん」と称している。能郷谷に沿って車道が走っており、つまり所に登山口の指標がある。ここから急斜面を三時間半。標高五九七六尺の木柱の建つ頂上へ着く。南に少し下った所に白山権現の小社がある。これは、前記白山神社の奥社である。風速二十五メートル。雨も混えて視界ゼロ。四〇度の雪の斜面を慎重に下る。下る程に雨は強まりパンツまでグツショリ。私は途中で転倒し右ひざを負傷したが、出血も気付かなかった程の濡れさまである。

能のふるさと、美人の里、能郷を去るに当って、緑したたる谷間より仰ぐ、白山の美形に接することができなかったのは、唯一の名残であつた。

山岳写真家

風見武秀氏に叙勲

山岳写真の草分けの一人であり、こんにちなお、現役として活躍している山岳写真家・風見武秀氏(七二)は、このたびの春の叙勲で、この道一筋、山岳・自然写真界に多くの功績をのししたことにより、勲四等瑞宝章の榮に浴さ

お知らせ

今夏

『国際アルピニスト大会』

松本市で開催

大いなる自然に抱擁された信州は、一五〇有余のぼる二、〇〇〇メートル以上の山々、五〇〇を越える峠の数々など全国有数の山岳県であり、殊に三、〇〇〇メートル級の日本アルプス連峰はアルピニストのメッカとして広く内外に知られているところである。

本年は、中部山岳一帯が日本アルプスと称されてから約一〇〇年、またウェストン祭が四〇周年を迎えたのを機会に、国内で初の試みである「国際アルピニスト大会」を岳都松本の地で、国際アルピニスト大会組織委員会(会長・松本市長)の主催で開催されることとなった。

とくに大会の中心となる、シンポジウムは、日本山岳会並びに日本山岳協会の後援協力のもとに開催されるもので「山と人間」を、メインテーマとするいくつかのプログラムを通じて、地域社会の多くの人々が、自然と人間とのかかわり合いについて理解と認識を深める機会となることを目的に開催される。

一、国際アルピニスト シンポジウム

「山と人間」というテーマを、国内外の著名な登山家を中心として自然保護、登山教育、山岳遭難予防、登山技術、高所医学等について各国登山界の現状報告と併せ広く深く掘り下げることにし、国際的な視野での「山と人間」の関わりを考え、山が人類にとって共通の財産であることを確認する。

期日 八月二十日～二十二日の三日間

会場 松本市音楽文化ホール

松本市民会館

シンポジウムのプログラムの詳細は、目下、大会組織委員会のシンポジウム委員会が調整中ですが、

◎第一日(八月二十日)

開会式(午後一時予定)

基調講演

「日本の登山史とマナスル登頂三〇周年」

引続き、ノーマン・ハーディ氏等の講演を、

◎第二日(八月二十一日)

「現代の登山・安全と教育をテーマに」アンセルム・ボー氏等から発表を、

「世界各国の登山事情、自然保護活動等をテーマに」参加各国の代表から発表を、

「登山と高所医学をテーマに」ハウストン氏等に発表を、

◎第三日(八月二十二日)

「山を次代へ」等をテーマに、田中邦雄氏等から発表の後、

記念講演

「自然を語る」名誉会員西堀栄三郎氏

「松本宣言」「閉会式」

「公開座談会」

今井通子さん等により八月二十三日～二十四日から実施される、親と子のトレッキングのための登山教室を開催する。

二、日本アルプストレーッキング

常念、西穂、上高地、八方尾根、美ヶ原等六コースに分かれ、親と子を中心にしたトレッキングを日本山岳会信濃支部、長野県山協が指導を担当し実施する。

お知らせ

れた。

風見氏は大正三年、東京生まれ、中学時代からも山の自然に親しみ、しかも、山の写真を撮る目的で山歩きを続けること五十五年、いまでは一年の半分は海外の山々にレンズをむけている。

昭和十四年結成された東京山岳写真会(現・日本山岳写真協会の前身)のメンバーの一人として、当時、船越好文、今井雄二、穂苅三寿雄、清水武甲氏らと活躍する。戦中は海軍の嘱託としてニューギニアへ。戦後しばらく銀座でカメラ店を経営しながら、もっぱら本格的な山岳写真の撮影にとりくむ。

昭和三十三年、作家の深田久弥氏らとネパールヒマラヤへと撮影行、以来ヨーロッパアルプス、アメリカ大陸など、最近では中国の山に魅せられながら、世界の秀峰にカメラをむけている。

それらの作品は、数多くの写真展や写真集にまとめられ、また、ネパールのポストカードにも収められている。

叙勲の朗報に接した風見氏は「立派なことをしたというより、長い間ただ一筋に山の写真を撮り続けてきた。これを機会にさらに山の自然の素晴らしさを撮り、しかも、山と人間のかかわり合いを表現できるような作品を撮ってゆきたい」と意欲を語る。

また、山岳写真を通じて国際交

流に果たした役割も高く評価されている。

五月二十四日、風見氏の受賞を祝って盛大な祝賀会が東京・千代田区のホテル・ニューオータニで開催された。この日、全国各地から友人、知人ら約三五〇名、日本山岳会からは佐々保雄、吉沢一郎氏らも出席、叙勲をお祝いした。(羽田栄治)

報告

京都支部設立

—京都支部に

九十三人—

日本山岳会京都支部の設立総会が、三月十五日午後四時から京都市左京区の京大会館で開かれた。今西寿雄会長、大塚博美副会長、松井辰弥岐阜支部長らの来賓を迎え、約六十人の会員が、支部規約など承認、初代支部長に斉藤淳生氏(新河端病院院長、七九年JACチヨモランマ登山隊隊長、八〇年同本隊参加)を選んだ。

今西会長は祝辞のなかで、関西支部が設立された時、小島鳥水氏が「関西は謀叛をおこすのか」と烈火の如く怒った、という逸話を引いて、「関西支部長としては、京都支部の設立を謀叛として怒らねばならないが、会長としては新しい発展を期待して喜ぶべきことである」と述べられた。

続く祝宴では、設立発起人代表で、元会長の今西錦司氏が「日本

お知らせ

三、この他シンポジウムに併せて松本市内を会場に「植村直己冒険の軌跡展」、イタリアのセルラ山岳写真博物館所蔵のガラス乾板による「山岳写真展」「世界の山岳昆虫展」「山岳文庫展」等が

マナスル登頂記念

トレッキングの日付等

変更について

三月号会報(四八九号)でお知らせした、標記トレッキングの日時等が左記のように変更になりました。

記

期日・コース・募集定員・予定参加費用

一、本年十一月十六日(日)〜二十五日(火)

十日間 二十名

マナスル展望の山旅 約三三五、〇〇〇円

二、本年十一月十一日(火)〜二十五日(火)

十五日間 十五名

サマとマナスル峰ベースキャンプ探訪 約四六三、〇〇〇円

三、本年十一月十一日(火)〜二十二日(火)

二十二日間 十名

一の支部に育てよう」とはっぱをかけ、熱気あふれるピクニックになった。

京都支部設立の要望は、古くからあったが、これまで強力な関西支部の区域内にあったため実現しなかった。今回、一月初めに発起人会を設け、京都・滋賀地区在住会員九十四人(一九八五年版会名簿による)を対象にアンケート

開催される。※多くのJACメンバーの参加をお待ちします。詳細は信濃支部まで。(日本山岳会信濃支部)

マナスル一周の山旅(ラルキヤ・ラ峠越え) 約四九三、〇〇〇円

(何れのコースも会員外三万円高、最小携行人数は十名)

隊員参加条件 二と三のコースについては、申込後に指定の方法で健康診断を受けて頂き、その条件に合う方。また、各コースとも指定のトレッキング保険に加入して頂きます。

費用に含まれるもの 各日程表示の交通・宿泊・食事及びリーダー同行諸費用。

募集対象 本会会員、会員家族、会員友人。

申込方法 申込用紙に必要事項を正確に記入のうえ、本会事務局宛ご提出下さい。同時に申込金五万円を三菱銀行恵比寿支店(普通預金口座No. 456666 日本山岳会マナスルトレッキング代表 鈴木邦之)へお振込下さい。

申込締切 本年八月二十五日(定員に達し次第締切の場合もあります)

海外委員会

お知らせ

調査を実施したところ、七十六人から回答を得た(回収率八〇・八五%)。内訳は支部設立に賛成七十四人(内支部入会六十六人)であった。このため本部理事会に対しただちに支部設立の手続きをとる、二月の理事会で承認を得た。

支部の区域は主として京都府・滋賀県下で、設立時の会員は新規入会手続中を含めて九十三人だが

会務報告

五月理事会

5月14日午後6時30分

場所 本会ルーム

出席者 今西会長、大塚副会長、橋本、大橋、梅野、高遠、鈴木、新井、岡沢、絹川、関塚各理事、松田、宮下各評議員
 委任 山田副会長、嶋原、松永、浜口、大森、平井各理事、竹田監事

審議事項

○日本・中国・ネパール三国合同チヨモランマ登山の件
 中国の申入れを受け、検討の結果、今西会長を委員長として組織委員会を作り、前向きに計画を進めることについて 承認

報告事項

○ポーランド山岳会来日の件
 ○高所登山委員会、5月27日午後6時より、体協でシンポジウム「ポーランド登山隊の強さ」を、ポーランドより来日中の登山隊員他で行なう

○映画と講演の夕、6月2日午後6時より安田生命ホールで、ポーランド登山隊持参フィルム映写
 ○ポーランド登山隊歓送会、6月3日午後6時30分より、私学会館
 ○自然保護全国集会を今秋東九州支部の協力で実施予定
 ○山菜勉強会5月30日、本会ルームで。若葉会山行6月14日・15日(苗場山)
 ○その他委員会報告

ルーム日誌

五月

7日(水)	高所登山委
9日(金)	ポーランド関係打合せ
13日(火)	総務委
14日(水)	理事会
16日(金)	支部長会議、総会(番町グリーンパレス)
20日(火)	婦人懇談会
21日(水)	ポーランド登山隊来日
22日(水)	図書委
23日(金)	会報編集委
26日(月)	総務委
27日(火)	自然保護委
29日(木)	科学研究委
今月の来室者47名	
.....	
会員移動	
.....	
物故	
2203	山形 登
2353	広瀬 藤司
姓変更	
9480	武田 正子↓田原へ
退会	
5451	内藤 正広
1750	山本 忠誓
8243	坂原 忠清
夫婦会員	
9856	堀 光子(堀秀臣夫人)
支部変更	
8584	稲垣 文夫(その他へ)
5371	上尾庄 一郎(関西↓京都へ)
名称変更	
3917	トヨタ自動車工業(株)
	↓トヨタ自動車(株)
	山岳部

◎新しい山日記完成

山日記第五十一集ができました。新しく手帳サイズになり、定価八五〇円、会員頒価六〇〇円です。
山日記編集委員会

昭和六十一年七月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 今西寿雄

編集代表 岡沢祐吉

電話東京(261) 四四三三

振替口座 東京三十四八二九番

東京都港区六本木三ノ一ノ三〇

ABビル

印刷所 株式会社 技報堂